第90号
1984年3月25日

内容

第三世界的課題の普遍性……1～2
第125回大学共同セミナー……2～4
第126回大学共同セミナー……4～6
千人会，寄付金報告……6
事業部だより……7～8
新春の合宿に想う……8
わたしたちの合宿……9
法人ニュース……9
利用状況……9～10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
＜所在地＞
東京都八王子市下柚木（〒192-03）
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京 5-74590番
編集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人　中川秀恭
発行人　吉川孔敏
製作　中央公論事業出版

第125回大学共同セミナー
全体講義から

第三世界的課題の普遍性
――国をこえる、民族をかちとる――

東京大学教養学部教授
板垣雄三

〈第三世界とは何か〉。この問題を明らかにしていくには、その手始めとして〈アジアとは何か〉から捉え直さなければならない。アジアはそもそも東方、オリエントを拡大し、置きかえた概念である。ヨーロッパの歴史の中で、その自己認識の大事な手掛りとなったのが東方であった。まばゆい文明世界の展開する東方に向かって、ヨーロッパは十字軍という戦争を仕掛けた。イスラム教徒に占領された聖地エルサレムをキリスト教徒の手にとり戻す、というのがその理由づけであった。しかし聖地でかれらが発見したのは、アラブのキリスト教徒であった。戦うべき敵の正体を知らずに、なぜ民衆は聖地に向かったのか。かれらはヨーロッパ社会の中に住んでいるユダヤ教徒をユダヤ人と考え、東方世界の廻し者とみなして、その財産と生命を次々に奪った。ヨーロッパ社会に存在するユダヤ人問題は、実に東方を具体的にイメージするための道具立てとして、生み出されたものなのである。

この十字軍は、やがて大航海時代への道を開くことになった。大航海の戦略構想はイスラム世界を包囲することにあったが、同時にイスラム世界のさらに東方に自分達の味方を期待していた。中国や日本に向けての布教活動はその一環であった。19世紀初頭になると、言語の研究が進み、インド＝ヨーロッパ語という考え方が生まれ、アーリア人という意識が作り出された。ヨーロッパが戦うべき敵はセムであり、味方にはインド亜大陸からイラン人までも含んだアーリア人の大連合も考えられた。アジアの中に味方を予定する考え方は、ヨーロッパにおける産業の発展に伴って次第に削ぎ落とされ、それまでヨーロッパ人が抱いていた東方への畏怖や憧れも薄らいでいくことになった。

こうして新しい時代に入ったヨーロッパは、十把ひとからげにアジアを取り扱うことができるようになり、あらゆる非ヨーロッパ的なものがアジアという言葉で代表させられるようになった。非ヨーロッパ的なものをどのようにしてヨーロッパ化していくかという考え方は、マルクスにおいても大きな影を落としている。

日本においてわれわれが受け取ってきたアジアとは、このようにヨーロッパ対アジアという二分法で考えられてきたアジアに他ならない。われわれは〈アジアと日本〉という問題の立て方を何ら疑うことなく受容してきたが、最近、ここに次のような二つの態度が生じてきている。一つは、日本の社会や文化の特異性を強調する立場である。明治維新以後の産業化が今日の目覚ましい発展をもたらしたのも、実は徳川時代からの文化の蓄積があったからだ、と考える。そこでは日本は決定的にアジアと訣別し、脱亜入欧どころかヨーロッパからも卒業した、という自信さえ伺われる。もう一つは、日本とアジアとの結びつきをどこかに求めようとする立場である。それは古代史ブームやシルクロードへの関心となって現われている。騎馬民族の歴史や稲の道を辿りながら、日本文化のルーツをアジアのどこかに求めていく。しかしそこでは、中越戦争の狭間で暮らしている人々、仏教遺跡の傍に住んでいる人々のことは全く忘れられている。

これらの二つのパターンは、相互に均衡をとり合い、巧みに結びついて、一つの構造をなしている。日本の近代思想史の中で捉えてみると、この構造は、実は近代日本が抱えつづけてきた問題であることに気づく。脱亜論は、ある時期にアジアの侵略を助ける思想となったが、ある時期にはアジア連帯を旗印とするアジア主義が侵略の重要な発条ともなったからである。このような互換性こそ、日本の思想史の中で最も問題にされねばならないのである。

さて、ヨーロッパがヨーロッパとなるための踏み台として設定されたアジアの概念は、20世紀に入り新しい現実の中で〈第三世界〉という言葉に置きかわった。第三世界として枠づけられた社会の将来が論じられるとき、たえず問題にされるのが〈近代化〉である。ここでの近代化とは、第三世界が近代の中ですでに経験せざるを得なかったそれではない。また、そこに住んでいる人々が考えていることとも無関係に、「第三世界はこれから変わっていくべきだ」という要求が、外から押しつけられている。日本の社会でも同様に、第三世界はこのような近代化の文脈に沿って議論されることが余りにも多い。このことをまず自らの手でえぐり出してみることが必要である。そのようにして初めて、おのおのがそれぞれにナンバーワンであるような、ユニークな文化をもった様々な社会を包み込んだ世界として第三世界を捉え、それを全体として眺め直す眼を獲得していくことができる。近代化的処方箋を批判しうる眼が今ますます求められているのではないか。

その際にわれわれに課せられていることは、「国民国家」システムの考え方にどっぷりとつかってしまっているものの見方を、どこまで払拭できるかということである。第三世界の人々とは自分の国をもてない人々、自分の国だけに縛られない人々、あるいは自分の国にこだわる場合でも、自分達がこれからかちとろうとしている国が別にある、と考えている人々であることがわかってくる。自分は

（次ページ5段めへつづく）

第125回大学共同セミナー

主題＝第三世界の文化状況
――人間の解放とアイデンティティの模索――

期日――'83年12月16～18日

〈全体講義〉
第三世界的課題の普遍性―国をこえる、民族をかちとる―
東京大学教授　板垣雄三氏

〈ゲスト講演〉
作家　李　恢成氏

〈パネル・ディスカッション〉
―第三世界とわれわれ―
一橋大学教授　海老坂　武氏
国学院大学教授　楠原　彰氏
日本A・A作家会議事務局長　栗原幸夫氏

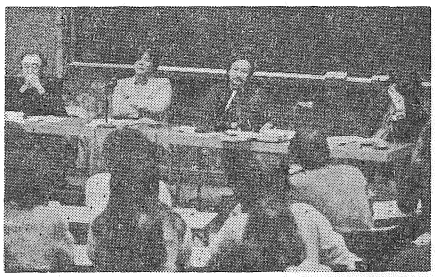
〈セクション演習〉
A　アジアと日本の近代化
横浜市立大学教授　加藤祐三氏
B　ASEANと日本―相互理解・反省に立つ協力関係を求めて―
京都精華大学教授　クントン・インタラタイ氏
慶応義塾大学教授　深海博明氏
C　アフリカは遠いか―民衆の参加、民衆の表現―
国学院大学教授　楠原　彰氏
D　中米・カリブ海の歴史を見直す―反植民地主義史観、民衆文化、知的創造―
青山学院大学教授　加茂雄三氏
E　ユダヤ人と中東問題
仏語教師　広河ルティ氏
東京大学教授　板垣雄三氏
F　第三世界の文化と人間解放
和光大学教授　針生一郎氏

〈ウード演奏〉
ハムザ・アッディーン氏

〈運営委員〉
東京大学教授　板垣雄三氏
慶応義塾大学教授　深海博明氏
日本A・A作家会議事務局長　栗原幸夫氏

〈参加学生〉78名（内女子34名）
東大(9)、東京外国語大(7)、早大(6)、ICU、法大(各5)、筑波大、慶大、中大、津田塾大（各4)、一橋大（3)、京都、東京農工大、学習院大、国学院大、東京女子大、日本女子大（各2)、東京学芸大、東工大、お茶の水女子大、明大、明星大、立大、産業能率大、都留文科大、大妻女子短期大（各1)、その他（6)

◇



パネル・ディスカッション：左から
栗原，海老坂，楠原，李の諸氏（講堂）

「第三世界の文化状況」をテーマに大学共同セミナーを開催してはどうかとの企画案が、日本アジア・アフリカ作家会議（以下A・A会議と略記）から企画室に持ち込まれたのは、一昨年12月のことであった。共同セミナー委員会で検討を重ね、板垣・深海両委員、A・A会議事務局長栗原氏にセミナーの運営委員をお願いして、企画の細部が練られることになった。三氏はじめセミナーを指導していただいた諸先生に改めて感謝の意を表したい。

◇

セミナーの開講にあたり栗原・深海両運営委員から次のような主旨説明があった。今日の世界の動向は第三世界を中心に動いているとさえ言えるにもかかわらず、日本社会の世界認識には第三世界と呼ばれるアジア、アフリカ、ラテンアメリカが正当に位置づけられていない。

「われわれにとって第三世界は本当に近いのか。第三世界はわれわれに何をつきつけているのか」**（栗原幸夫氏）**

「第三世界は多様だ。各国の独自性を踏まえつつ、どうすれば第三世界を正しく理解することができるか」**（深海博明氏）**

この問いからセミナーはスタートした。

開講式に続く共通セッションではテーマに対する各氏のアプローチが提示された。

「幕末開国から現在にいたる日本の近代化の中で、日本人の世界認識から第三世界が欠落しているのはなぜか」**（加藤祐三氏）**

「援助される相手国の視点に着目しつつ、経済ばかりでなく文化的側面からも援助のあり方を考えることが必要だ」**（クントン・インタラタイ氏）**

「特権階級の支配装置である文字文化からではなく、音楽、演劇などを通してアフリカを考えていきたい」**（楠原彰氏）**

「中米カリブ海地域の歴史を従来のような植民地主義史観からではなく、地域内部の民衆の視点から見直す」**（加茂雄三氏）**

「パレスチナ人問題と重ね合わせながら、国家・国籍に縛られた人間のイメージを解き放つ思考実験をする」**（広河ルティ氏）**

「帝国主義が経済と文化を支配手段とする〝新植民地主義〟へと展開するなかで、みずから抑圧されつつ第三世界の抑圧者となっている日本人の位相を考える」**（針生一郎氏）**

なかでも「生活様式や生産様式と結びついた本来の文化と権力の支配装置と化した文化とがせめぎ合っている狭間」が現代の文化状況であり、「第三世界の解放闘争は文化革命的性格を帯びざるをえない」という針生氏の発言は印象に残った。

続いて板垣氏による全体講義「第三世界的課題の普遍性」（詳細はフロントページ参照）が行なわれた。アイデンティティ複合の世界に生きながら、「自分がいかなる者として生きていこうとしているのか」を日々政治的に選び分け、たたかいとっている第三世界の人々を目のあたりにする時、〈一民族、一人種〉という日本人の考え方がいかにイデオロギー性を帯びたものであるかが明らかになる。われわれ自身の中に第三世界を創り出しながら、「国民国家」システムという考え方をどこまで払拭できるかがわれわれの課題である、と氏は自明性の世界に安住しているわれわれの意識をゆさぶった。

夕食後は、各セミナー室に分かれてのセクション演習が深夜まで続けられた。

◇

第二日は午前中のセクション演習の後、**李恢成氏**によるゲスト講演があった。氏は自分の置かれている特殊な立場性を人間の「想像

（前ページよりつづく）

いかなる者として生きていこうとしているのかを、日々政治的に選び分け、たたかいとっている人々の姿がそこにある。時々刻々と新しい民族が形づくられ、「日本国に属している日本人」という類推がきかないアイデンティティの複合の世界が見えてくるのである。しかも、第三世界のこうした動きは、実は世界全体の動きを先導しているのではないか。

このセミナーで皆さんにぜひ、試みてもらいたいことは、われわれが安心して受け入れている〈日本人〉という考え方、日本の社会を覆っている〈一民族、一人種〉というイデオロギーを徹底的に崩していってほしい、ということである。日本の社会の中にも第三世界があることを確かめ、また、皆さん自身の中にも第三世界を創り出していく作業を始めていただきたいのである。

（第125回大学共同セミナーの全体講義より。文責・編集者）

力」と文学の関わりの中で語る。日本の文学状況はかつてもそうであったように、「他者へのまなざし」を欠落させた小市民的で自己完結的な構造をもっている。文学とは結局「人間との永遠の対峙」に他ならない。そこでは「あるドラマを述べることが目的ではなく、人間をどう描写するか」ということが重要だ。文学者にとってパレスチナ問題はたんに中東の一民族の問題ではなく、人類の共生をかけた普遍的な問題であり、「他者へのまなざし」としての想像力は人間的生の根底にある原理だとして、日本の現代文学の小市民的世界とそれに甘んじているわれわれの精神の閉鎖性を鋭く指摘された。

講演の後、ティー・タイムをはさんでパネル・ディスカッション「第三世界とわれわれ」が展開された。サルトル研究者として著名な**海老坂武氏**は、第三世界との関わりについて次のように語る。

「55年のバンドン会議を契機に第三世界を政治問題として意識するようになったが、当時はまだ日本の加害性には気づかなかった。60年代中期以降の新しい世界情勢、特にベトナム戦争を契機とした日本での新しい思想運動の過程で第三世界に対する考え方が根本的に反省された」

また**楠原彰氏**は自分史の中から第三世界との関わりを語る。「私はつねに〝自己への惑溺〟からどうすれば脱脚できるかということばかり考えていた。自分が変わるということは他者とのの っぴきならぬ関係を打ち破ることだ。自分にとって他者とは、父親であり、また新潟に対する東京であり、日本に対するアフリカであった」

さらに20世紀初頭と80年代の世界は根本的に異なるとして、あるアフリカ人の発言を**楠原彰氏**は引用する。「ケニアでも、韓国でも教育も文化も経済もみんな自国の権力者や国民だけでやっているように見えるが、実際はニューヨークの世界銀行あたりに拠点をもつ目に見えないパワーがコントロールしている」「国際的な帝国主義の力のもとでどうやったら生きていけるか、そこからどうやって自分で決定する力を取り戻すか。これにまさるアフリカの民衆が直面している重要問題はない」と。

二氏の発題をうけて、特別参加の写真家・**広河隆一氏**は「米・仏軍の艦砲射撃のあと、米軍基地が爆破された。これをテロ行為だと日本を含む先進国のジャーナリズムは報道しているが、両軍による射撃は一般民家への無差別攻撃であったことの報道はない。われわれはちぐはぐな情報環境の中に生きている」とレバノン戦争の実状を訴える。

また映画を通してラテンアメリカの民衆と連帯を続けているA・A会議のメンバーでもある**太田昌国氏**は「各人が独自のチャンネルをつくり、第三世界の人々から直接情報を得ることによってわれわれのもっている世界像なり歴史像を変革できないのか」と問いかけるだけでは問題解決にならない」と疑問を投げかける。またある学生は「われわれは植民地にいって経済侵略をしたことはない。したがってアジアの人々に対して済まなく思う必要はない。またかつての日本軍による大陸侵略もわれわれが直接関与したことではないので日本人だからという理由だけで済まなく思う必要はない」。さらにある大手保険会社勤務の社会人は「経済侵略の実体はわかるが、企業に入ると利潤を上げなければ競争に負けてしまう」と。

これに対して**栗原幸夫氏**は「生き残るためには進出しなければならないという論理にそって自分と企業を同一化する必要はないのではないか」。また**楠原彰氏**は「植民地主義というのはたんなる経済搾取でも土地収奪でも労働力搾取でもない。それは人間の抹殺だ」「なぜやりたくない仕事をしなければならないか。食うためには仕方がない、そのとおりだ。だが、そのリズムを少しずつ崩さなくてはいけない。それはラジカルな方法でできるはずはなく、毎日の積み重ねでしかない。日本人がかかえている苦しみや悲しみや抑圧は同じようにアフリカ人もかかえている」と主張する。

第三世界を考えることは、同時にわれわれ自身を問うことに他ならない。だから「職場での問題もつきつめて考えていけば必ずアフリカ人と共通の問題に行き着く」だろうし「日本民族の変革という課題をぬきに第三世界の人々との連帯はありえない(**李恢成氏**)ともいえる。情報化社会の中で世界のあらゆる出来事が自由に手に入るかのように錯覚しているが、実はある重要な局面の情報は管理され民衆には知ることができない。こうした見えない現代社会の構造そのものを問う議論までには至らなかったが、第三世界を考えることが、同時に日本の近代百年の歴史とその現在を考えること、であることが確認された。

夕食後、ウード演奏会が当日のハウス宿泊者を交えて講堂で催された。スーダンの民族衣装を身につけた**ハムザ・アッディーン氏**による演奏は、素朴な響きのなかに悠々の時の流れを感じさせ聴衆を魅了した。セミナー参加者は居ながらにしてイスラム世界の「民衆の表現」に接し、「第三世界の文化」の多様性・重層性を実感できたことだろう。

ウードを演奏する
ハムザ・アッディーン氏

◇

最終日は、参加学生の自主運営による総括討論が二時間三〇分余りにわたって行なわれた。各セクションの代表者による演習報告が順次なされた後、活発な意見交換があった。紙幅の関係で論点のみ記しておきたい。①第三世界はわれわれ自身を写し出す「鏡」である。②政府援助は往々にして現地の一部勢力がその恩恵に浴している、つまり援助の中身が問われなければならない。③物質的な豊かさは人間的な幸福につながるか。④われわれは第三世界のどういう人々と連帯すべきか。

最後に、三日間を振り返って指導教授から次のようなコメントがあった。

▼**針生一郎氏**「全体の構造が見えないために、善意だが、政府や企業の手先になっていることが多い。解決の道は、民衆の立場にいて腹蔵なく話せる友人を見つけ、その人と対話を深めることが迂遠のようだが一番具体的な方法だ。対話を深めようとすれば、自分も相手も自国の文化や国家の殻をぬけ出さざるをえなくなる。国家を超える想像力をもつことは難しいが、このように具体的な相手を通して目に見えない構造を知ることが第一歩だ」

▼**栗原幸夫氏**「自分とは違う意見を手離すな。企業との一体化を国家との一体化まで拡大する発想は危険だ。自分が体験してないことはわからないということは絶対にない。自分が直接体験しないことを想像力をもってつかむことが〝学問〟だ。自分は戦争を体験してないから、と突き離さないで、その時代を単に知識としてではなく、具体的なイメージを描くようなかたちで追求してほしい。

いまの日本の豊かさは、ひとつのモノに二つも三つもの記号が飛びかっている〝記号の豊かさ〟に他ならない。記号のベールを剝いだ時に、モノとわれわれの関係がいかに貧弱であるかを忘れてはならない。この点は第三世界の近代化を考える場合の足場となる」

▼**板垣雄三氏**「多くの参加者が人

（次ページ3段めへつづく）

第126回大学共同セミナー

主題＝人間性の回復を求めて

――現代における救いの問題――

期日――'84年1月14～15日

〈ゲスト講演〉

人間性の回復―現代人の救いについて―

二松学舎大学教授　佐古純一郎氏

〈セクション演習〉

A　現代における人間性の回復―ブーバーの我・汝の関係の思想を中心として―

早稲田大学教授　谷口龍男氏

B　罪と救い―エレミヤと現代―

慶応義塾大学教授　小泉　仰氏

C　解脱と救済―仏教と現代―

早稲田大学教授　峰島旭雄氏

（運営委員）

D　救いを阻害するもの―タナトロギー（死学）をめぐって―

大正大学教授　藤井正雄氏

〈参加学生〉45名（内女子17名）

東大、早大、慶大（各3）、筑波大、東京女子大、立正大、ICU、玉川大（各2）、千葉大、東京外国語大、東工大、一橋大、横浜市大、電通大、東経大、東京神学大、独協大、津田塾大、法大、立教大、和光大、学習院大、上智大、中央大、大正大（各1）、その他（9）、合計25校

◇

人間らしい人間として生き、かつ死ぬことは、われわれの変らぬ願いである。しかし、「そもそも人間とは、人間性とは何か」と自問してみるならば、それはまともに答えるのが最も困難な問いの一つであろう。とりわけ人間疎外の時代といわれる現代は、人間性を埋没させ、こうした問題について、無自覚的に時を過ごすことをわれわれに強いている。物の豊かさと便利さの只中にあって、われわれは、今人間そのものの在り方をその根本から問われている。「満たされた胃袋と空っぽの魂」が、現代日本人を象徴する現実の姿なのではあるまいか。このような状況の中で、人間性の本質を問い、人間本来の人間らしさを取り戻すためにはどうしたらよいのか。以上が、今回のセミナーに課せられた最も大きな課題である。

◇

今回のセミナーの基本的プランは、企画・運営にあたられた**峰島旭雄**氏の構想力によるものである。氏によれば、現代における人間性の回復の根底には、宗教の問題があり、それは真の意味での宗教の回復につながっている。そうした前提に立って、本セミナーでは特に、キリスト教と仏教の原点に立ち戻り、さらには実存哲学や現代の宗教思想の指摘をも参照しつつ、現代人の人間性の回復の道を求めることに焦点が絞られた。

今回は一泊二日のショート・セミナーであったが、目まぐるしい日常生活の中では、決して開示され得ない「人間性」や「救い」といった人生の奥義を、参加者一同真剣に語り合うことができ、その意味で、自らの人生を切り拓いてゆくための新たな視野を獲得する絶好の機会と場をかれらに提供することになった。

◇

初日のプログラムは、わが国のプロテスタント・キリスト教界の長老である**佐古純一郎氏**のゲスト講演によって開始された。氏は、現代における救いの問題を通して人間性を考えることは、われわれ一人一人が避けて通ることのできない非常に切実な問いかけであると前置きされ、以下のような問題点を指摘された。「人間という言葉には、〝ニンゲン〟と〝ジンカン〟の二通りの読み方があるが、人間性の回復を問題にする時に

（前ページよりつづく）

間性のぬけ落ちたコミュニケーションの中に逃げ込んでいる。確かに意見の応酬は見られたが、どこかで互いにいたわり合っている。たんに自分の意見を述べるだけでなく、自分の意見をも疑うような〝知的勇気〟をもってほしい。意見の違う人々といかに仲良くやっていくかを第一に考えるのではなく、自分の内側に多様な自分を作り出すことが大切だろう」。

この三日間のセミナーで、ある人は既存の認識枠が打ち砕かれ混乱し、またある人はますます当惑することになったかもしれない。しかし第三世界はどこか遠い国々の話ではなく、いまやわれわれ自身の内部にも発見できる普遍的な問題性をもつ世界であることが、参加者の脳裏に鮮明に焼き付けられたことだろう。参加者から寄せられた感想はそのことをよく伝えている。

第三世界への共感と戸惑い

東京大学仏文科三年　**前田　礼**

「第三世界とわれわれ」と言った瞬間、「第三世界」と「われわれ」の間に横たわる〝と〟という文字が私の眼前に聳え立つ。私にとって第三世界とは、常にこの巨大な〝と〟に対する「戸惑い」である。私たち日本人は「脱亜欧」を掲げ、これまで西洋との比較に専念してきた。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々とそこに生きる人々が、どのような価値観をもち、どのような抑圧や差別と戦う文化を創り出しているのかを知ることは、日本文化の真の自覚と再生の道につながる。その可能性をこの〝と〟の中に予感しながらも、一方でその倫理的、理性的レベルを超えた感性レベルでの言い知れない異和感に私は戸惑うのである。

第三世界文化は、物質文明による崩壊の前兆に怯えながらも、しっかりと人々の生の営みに根を下した民衆の共同体思想に支えられた文化といえるだろう。個別に分断された生命が、無限の連鎖となり、広がりをたたえた沈黙となって横たわる。そこではすべてが響きあい、すべての存在の中に〝私〟が刻み込まれている。しかし、このようなイメージを描き出した後に私におとずれる戸惑いは何か。

たぶん私は、おびただしい量の商品と快楽を手に入れることができる日本の現在の文化状況の中で、第三世界とその闘いから居心地よく離れた距離にいながら第三世界を〝語る〟ことで、急進的共感を湧きおこらせている自らの立場に戸惑いとある種の偽善を感じているのだろう。

セミナー参加後、ますますこの戸惑いは大きくなるばかりである。しかし、この戸惑いで終熄することなく、何か新しい価値観をもった文化をつくり出す営みへとつながっていきそうな予感を自分の中に感じている。

参加者のアンケートに拾う

◇日本の近代化過程における二つのアジアの捉え方は、私にとって新しい問題設定だった。そして板垣先生の〝言葉〟の使い方に共感をもつところが多かったし、李恢成氏のお話の中でひとつひとつの言葉のふくらみが印象的だった。（ICU・経2）

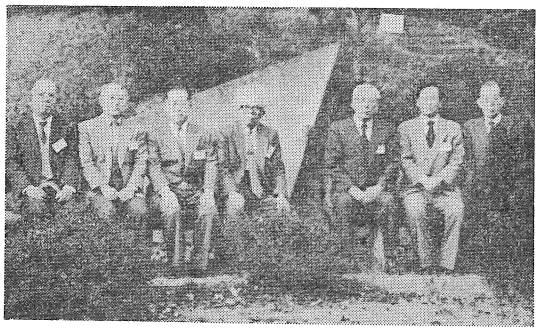
◇大学では見られない、より自由で奔放な時間を創り上げる人々、とくに教授陣がいることは、少し驚異的だった。（早大・政経3）

は、人と人との間を意味する関係概念としてのジンカンとして考えられなければならない。マルチン・ブーバーは、これを〝初めに関係がある〟という美しい言葉で表現し、人の存在を徹底的に関係性において捉えた。人は一人で生きることはできず、われわれは他者と向かい合う人間（ジンカン）として以外に、一日たりともその

生を送ることはできない。

人の本来的なあり方は、このように他者との人間性（ジンカンセイ）を考えることなしには成立しないが、今日、人と人とのこの本来的な間柄性が、さまざまなレヴェルで崩壊している。現代では、ブーバーが我と汝として捉えた、本来、人格的であるべき人間の存在が、その本質的価値としての人格性を剝奪され、利用価値や有用価値によってのみ結ばれてゆく物件的存在にまで堕ちているのではないか」

さらに、佐古氏は一人の日本人としての問題意識から、「日本の歴史の中で、果たして回復するに足るような人格と人格との豊かな関係が成り立っていたのか」との



左から谷口、小泉、峰島、佐古、中川、藤井、吉川の諸氏

率直な疑問を提起され、「日本の精神史においては、人を人格として捉え、自己と他者の存在性の自覚の上に人間性をつくってゆくような存在的意識が基本的に欠如している」と指摘された。

最後に、氏は日本文学を専門とする立場から、明治以降の近代精神史において、人格観念がどのようにして成立していったかというプロセスを、具体的な資料をもとにして紹介された後、以下のような結論をもって、この講演を締めくくられた。「宗教が宗教である限り、宗派や教派の違いを超えて、人存在をかけがえのない我と汝の関係として自覚し、承認してゆく思想を持っている。人が自分の目的や利益のために他人を利用し合うのでなく、一人一人が我としての人格を相互に誠実に受けとり、応答し合う責任社会を作り出してゆくことが、現代人にとっての救いの道である」

高い学識と深い信仰体験に基づいた氏の話は、聴衆に大きな感銘を与え、この後の論議のための重要な示唆を提供することになった。

◇

続いて、各指導教授がセクション演習に掲げたテーマを解説する共通セッションに入った。実存哲学（谷口龍男氏）、キリスト教（小泉仰氏）、仏教（峰島旭雄氏、藤井正雄氏）の立場から、それぞれご自身の学問や宗教との出会いの経験を披瀝され、次のように問題提起をされた。

▼谷口龍男氏

ブーバーは人間存在の基本的あり方を、人間が人間と共にあることとして捉え、彼の思想を展開してゆく。そこでは出会いという概念がきわめて重要な位置を占めているが、それは人間の本来的あり方で、心の通い合いによって他者と共にあることを示している。出会いは利害で結ばれた相互関係を超えたところに開けてくる純粋な心の交流のことであり、人間が本来住まうべき故郷である。それは、人生における驚異中の驚異であり、その人の全人格をゆさぶるような根本的出来事なのである。

▼小泉仰氏

人と人の間を最も根本的に関係づけるのは、人と神との関係である。バビロンやエジプトなどの強大な国家の狭間にあって、神の言葉を与えられた預言者エレミヤは、どのような形で神と出会い、生きていったのか。彼はユダ王国の人々が犯してきた罪について鋭い分析を加えているが、それは現代社会において、われわれが直面する人間の罪の問題に、どのような照明を与えることができるのか。預言者としてのエレミヤの救いへの苦闘を探ることを通して、神と人との関係を学んでみたい。

▼峰島旭雄氏

現代において仏教は、葬式仏教のように非常に形骸化している反面、仏教ブームに見られるように、その思想と実践が新たに見直されている。現代のこの一見相矛盾するような二つの評価は、何を意味しているのか。仏教でいう解脱は、自分の力で修業して悟ることであるが、それに対して救済は〝こちら〟からでなく〝あちら〟からくる。特に科学至上主義や人間中心のヒューマニズムを信奉する現代人にとっては、自力主義がそのバックボーンをなしているが、そのアンチ・テーゼとして他力の真の意義を認めるべきではないか。また、無明や煩悩の覆いを取り除き、人間が本来もっている仏性に目覚めることによって、人間性を回復することができるのではないか。

▼藤井正雄氏

仏教の教えとは何かと同時に、なぜその教えが現代社会の現実に生かされないのかが問題である。仏教の教えと現代に生きる日本の民衆との間には、救いを阻害している要因が多く存在しているのではないか。

たとえば、近年、人間の誕生や死は病院で迎えられることが多くなり、人間の生命の神秘の重要なモメントが、宗教家ではなく医者によって取り扱われている。その場合、たとえば医者と臨死の患者の間で、実際に宗教の倫理が働くか否かが問題である。患者から苦しみや不安を取り除くためにはどうしたらよいのだろうか。それはもはや宗教の問題ではなく、人々が伝統的に育んできた生死観や他界観等の文化の問題なのである。

◇

共通セッション終了後、参加者はそれぞれの所属グループに分かれ、セクション演習に入った。演習は、夕食を挟んで、夜遅くまで行なわれ、翌日の午前中の部へと続けられた。

ハードなスケジュールの中「時間が少し足りなかった」との感想も寄せられたが、短時間にさまざまな人と共通の話題について、密度の高い討議ができ、大変啓発されたとの感想も多かった。

◇

二日目の午後は、延べ六時間半、三回にわたったセクション演習の内容報告、総括討論を行なう全体集会にあてられた。個を強調しすぎた実存主義の欠陥に対して、我・汝の人格関係において、人間の尊厳をとり戻そうとしたブーバーの思想の意義、人間性の喪失を罪の問題として捉え、神と人間の正しい関係を回復しようとしたエレミヤ、智慧と慈悲を根本的な教えとする仏教と、神と人間との断絶を強調するキリスト教の人間観との相違、死の問題を扱う際の本音と建て前、理論と実践のずれ、生と死を一体のものとして捉えてきた日本人の伝統的生死観の喪失の問題などが、各セクションから選ばれたレポーターによって簡潔に報告され、指導教授による適切なコメントも交えて、参加者の全員参加による熱の籠ったディ

成人式<その一>――2人の新成人（左）にお祝いのことばを述べる小泉仰氏（交友館）

スカッションが展開された。

討論終了後は、場所を交友館に移して、送別茶話会が催された。参加者中、この日新たに成人となった二人の若者に対し、ハウス恒例の成人式が行なわれ、記念品が贈呈された。また新年のお年玉として、くじ引き大会などが開かれ、楽しい一時を過ごした。

◇

今回のテーマである人間性の回復や救いの問題は、専攻分野のいかんにかかわらず、各自が人間として必ず一度はぶつかる問題である。ある参加学生がいみじくも述べたように、それは「頭でっかちの知識だけでははかりしれない実践の重み」をもっているがゆえに、「自分一人で、いくら考えても堂々巡りの自己矛盾に陥ってしまいそうな問題」である。その意味でも、この共同セミナーにおいて「一人一人が、その人の全存在をかけて語りかけ、また相手も、全存在をもって、それを受けとり、応える場が実現した」（谷口龍男氏）ことはきわめて意義深い。参加者はこの丘での「一期一会」の意味を嚙みしめ、ここでつかんだことをこれからの各自の生き方に即して展開してゆくことだろう。

◆千人会……'83年12月～'84年1月

◇現在会員は一、六九七名です

大学人＝一、二七一名
社会人＝　四二六名

◇新しく会員となられた方々

4名〔第72回報告（申込順）〕

B　電気通信大学教授　松澤　通生殿
C　SASコーポレーション代表　佐藤　音彦殿
C　早稲田大学教授　平澤　茂一殿
C　上野学園大学助教授　船山　信子殿

◇会費ありがとうございます

新井益太郎、近藤保、茂木誠陸、大地羊三、青木生子、木村敏美、矢澤修次郎、内藤正、岡惺治、内田章五、吉永フミ、西巻正郎、慶伊富長、宮本勉、宮川透、増田茂樹、来住正三、平野健一郎、清水誠、城謙輔、築地整、杉山吉茂、高山成雄、有山正孝、池田温、三戸公、沢孝一郎、三浦安子、岡本敏雄、茅伊登子、塚本利明、濱川祥枝、竹内啓一、梶木隆一、高橋浩爾、川村亮、和田木松太郎、沼田滋夫、矢内喜久子、平木典子、三井爲友、西田亀久夫、川鍋正敏、小西正捷、石橋秀雄、伊藤修、外池正治、宮川松男、市川勝洋、早弓惇、勝木保次、浮田久子、須田精二郎、岡崎正、伊藤学、加藤利勝、岩尾裕純、伊藤文人、石井不二雄、浅野利昭、横田澄司、山鹿誠次、横沼健雄、合田信子、清水啓三郎、小林哲也、徳久球雄、中山光雄、石田孝夫、青柳総太郎、大塩俊介、上田明子、松山正男、中野卓、高橋恒郎、三浦永光、杉山好、甲斐隆、石山伍夫、天野成光、鬼塚宏太郎、石井明、遠藤健治郎、安味貞正、福原満洲雄、清水護、半谷高久、瀬野信子、大川章哉、白井泰四郎、東川清一、渡辺忠胤、赤松秀雄、後藤聰一、鈴木慎一、青井和夫、上山碩、大頭仁、佐藤公子、竹林代嘉、中鉢正美、森山俊雄、小山弘志、古田勝久、河田敬義、岩永達郎、鈴木皇、村上泰治、檜田信男、大羽滋、佐古純一郎、深沢実、川端香男里、大川信明、中富光国、田中英夫、北原文雄、石塚司農夫、若林貞雄、武田昌輔、乾崇夫、武藤義夫、新井明、高橋源次、慶谷寿信、光延明洋、佐藤音彦、吉川孔敏、師岡孝次、瀬川渡、内山正熊、船山信子、石井素介、萩原玉味、田上穣治、柳沢富雄、小川洋輔、小俣武夫、守永誠治、園田義道、若山邦紘、高橋昭三、加倉井茂樹、大内英吾、松原元一、根岸愛子、川喜田愛郎、永積昭、上谷琢之、磯野修、山田辰雄、谷口修、中山知雄、木村康雄、松元三郎、篠崎武、大森東亜、竹中肇、京極純一、小谷正雄、清水畏三、池井優、吉田公保

（敬称略）

●寄付金報告

'83年12～'84年1月

〈教育プログラム資金〉
三、000円　現象学解釈学研究会　高橋哲哉殿

〈一般寄付金〉
五、000円　早稲田大学鴨武彦ゼミナール殿
一0、000円　順天堂大学医学部新P3クラス・セミナー殿

〈植樹資金〉
一0、000円　第4回社会学合同セミナー一同殿
一六、八四0円　第一二五回大学共同セミナー参加者一同殿
九、六二七円　第一二六回大学共同セミナー参加者一同殿

私の大学生活とセミナー・ハウス

――卒業に際して――

東京大学経済学部4年　田口　清洋

大学セミナー・ハウスとの出会いは、大学構内の掲示板から始まった。それは、ちょうど天の啓示のようであった。なぜなら、それは古代ギリシャの哲学者たちが語り合った「アゴラ」のようなすばらしい空間へと私を導いてくれたからである。そこでは象牙の塔から解放された自由人が集いつつ、充たされた時間に生きることができた。

大学時代は、専門分野の知識を深めることはもちろんのこと、専門以外の学問領域に関心を広める時期である。今日では、諸学問の交流がますます要請され、特に私の専攻する経済学は隣接諸科学との学際的交流が盛んに求められている。そうした意味で、セミナー・ハウスは絶好の機会を私に与えてくれた。私は、現代に生きるC・G・ユング、第三世界の文化状況、人間性の回復を求めての三回のセミナーに参加したが、いずれも自分の問題関心を深めていくことができた。

セミナーに参加する仲間は、いつでも気楽に話しかけられるし、時間の許す限り、徹底して掘り下げた議論が可能であった。そうした経験を通して、語り合う楽しさを覚え、討論の姿勢を身につけることができた。

しかし、時には意見の食い違いや激烈な議論の対立により、緊張した雰囲気となることもあった。そこでは自分とは全く異なるものの見方や考え方をする他人が存在する事実を改めて確認する。それは、社会が個々人のぶつかり合いであることを知らせ、他人とどのような人間関係を保ったらよいかを教えてくれるものであった。

また、どうしても自分の真意が理解してもらえない対話に、他人とのコミュニケーションの難しさを意識したこともあった。これらすべては私に貴重な教訓を残してくれたが、そうした中で、自分の生き方を見つめ直させられるのであった。

八王子の豊かな自然環境の中に、独立したユニットハウス、セミナー室が巧みに配置され、配慮されたプログラムが組まれ、親切な職員の方々のお世話があって、そこには濃縮された学生生活があった。

出会った人々や展開された議論が感慨深く思い出され、清澄な空気に包まれた数多くの交流がすがすがしくよみがえる。

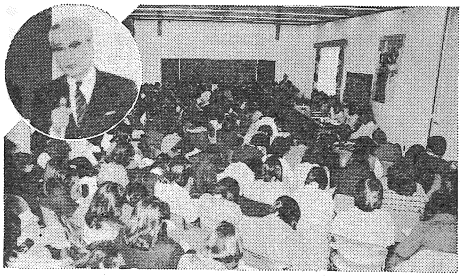
大学には、「卒業」という言葉はふさわしくない。友人に別れを告げることはもの悲しいが、文字どおり、「大」きく「学」ぶことは、これから始まろうとしているのだから。

●事業部だより

’83年12月・’84年1月 年末・年始のキャンパスから

12月は、冬休み開始直前・直後の合宿で活気を呈する月である。今年も年末の常連グループをお迎えすることができた。一方1月は、これも例年同様、学年末試験の影響で大学関係者の利用がぐっと低下、特に同月後半は週末を除くと閑散の日が多くなった。両月の利用状況を数字で示すと次のとおりである。

	グループ数	宿泊延人数（人）	定員比（%）
12月	一〇〇	三、五〇八	四八
1月	四九	一、八一八	二五

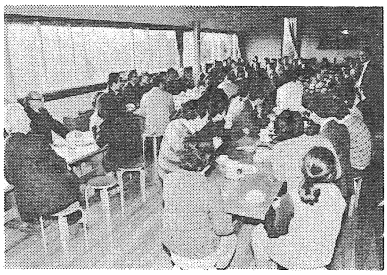


恵泉女学園短大「国際」ゼミナール――円内はパネル討議で発言する秋田学長（大学院セミナー館）

●年末の合宿から

別掲の「利用状況」で、年々この時節に欠かさず合宿を行なっている常連ゼミをご覧いただきたい。一五回を超すグループをいくつか拾ってみると、都立大・金沢ゼミ、早大・染谷ゼミ、慶大・佐藤研、杉野女子大・田村ゼミなど。上智大の高野雄一教授は、今年もこの時期に学部と大学院の国際法演習で二回来泊された。一〇年前、ハウス主催の大学共同セミナー（三回の「国連」シリーズ）の指導に当たられたことが、その後の利用の機縁となった。本号の『わたしたちの合宿』欄には、高野教授に登場していただいた（9ページに**別掲**）。

第125回大学共同セミナー「第三世界の文化状況」が開催された12月中旬の週末には、たまたま恵泉女学園短大英文学科の総合講座「国際」ゼミナールや慶大・小池国際セミナーも行なわれ、期せずして同宿の若者たちが、国際間・異文化間の人間のあり方について考えることとなった。今年で三回目の恵泉女学園短大のゼミナールは、年末最大規模（一八一名）の集会であった。学外から韓国人講師らを招き、「アジア問題」「国内における国際」「平和・人権問題」などをめぐり、熱心な討論を行なったが、秋田総学長も終始積極的に参加されていたのが印象的だった（**写真左上**）。慶大・小池生夫教授を中心とする六年目の「留学生との交流合宿」（二八〇名）では、日本人学生と九ヵ国の留学生とが、事前に内外の学生に行なったアンケート調査にもとづいて、具体的に如何にして相互理解を深め得るかを考察した。同週末の夜に行なわれた共同セミナーの特別プログラム、ハムザ・アッディーン氏（スーダン）による「ウード演奏」には、これら在泊のグループからも四二名が参加した。



東神大「教職セミナー」――館長招待のコーヒー・ブレイクで挨拶する松永学長（交友館）

●新春の合宿から

84年新春の〝初利用〟は、個人利用で来泊された大頭仁・早大教授と箱木真澄・福島大教授の両氏（ともに千人会員）、グループでは一六回目の常連、駒沢大電気美術部のリーダース・キャンプ（一六名）で、〝仕事始め〟の5日午後に相ついで入館された。翌6日には、産業能率短大の恒例二泊のリーダーズ・トレーニング・キャンプ（二四サークルの指導者ら六九名）など六グループ計一三五名。続く週末には、いずれも新春の常連、駒沢大・渋谷ゼミ（六七名）、立教大・香原ゼミ（二四名）など一〇グループ計二五〇名が、早々に合宿をされた。

第二週には、新春一五年目の東京神学大主催「教職セミナー」。全国各地からの教職者、院生、同大スタッフなど計一一六名が二泊され、恒例となった交友館でのコーヒー・ブレイクの席上で、中川館長と松永希久夫・新学長が友情あるメッセージを交わされた（**写真右上**）。他に全国的な研究集会には「種生物学シンポジウム」がある。毎年都立大の「生物学ゼミナール」で利用される小野幹雄教授らが中心となって企画されたもので、大学研究者、国公立研究所員など九〇名（日帰りを含め一五〇名）が参加。芳野赳夫・電通大教授ら八〇名が参集した日本山岳協会恒例の「海外登山技術研究会」も全国的集会である。

学年末試験で閑散となる厳寒1月末のキャンパスに、今年も活気をもたらしてくれたのは、三年目の順天堂大「新P3クラス・セミナー」（一一八名）である。医学部専門課程に進学する新3年生の合宿研修で、学生部長・浅見一羊教授ら教職員も二五名が参加された。ゲストの今道友信・前東大教授が「現代と愛」と題する講演の中で友情の尊さを熱情をこめて学生に語りかけられた（**写真右**）。

今道友信教授

●第4回社会学合同セミナー

12月最初の週末、社会学合同セミナー「現代における個人と社会」が二泊三日で開催され、四大学（慶応、法政、明治学院、早稲田）六ゼミからの一〇七名（うち指導教授五名）が参加した。

社会学を専攻する三大学五ゼミから出発したこのセミナーは、今回で通算四回目。前回まではハウス主催のプログラムとして行なわれたが、今回から〝自主ゼミ〟として独立し、新しい出発をしたものである。

慶大・山岸隆君を委員長とする各大学からの準備委員（スタッフ）を中心に、企画から運営に至るまで、学生の自主性が発揮されて、大きな成果を上げた。

成人式くその二＞――2人の新成人（正面）を合唱で祝福（第3セミナー室）

寒中御見舞申し上げます。

1月14日から15日にかけて、大変お世話になりました。大学一年生ばかりの基礎ゼミでしたので、学生たち全員がセミナー・ハウスは初めての経験でした。その中の二人は、特に成人式のお祝いまで受け、感激も大きかったようです。また今後ともお世話になることと思いますが、どうかよろしくお願い致します。先ずはお礼まで。

玉川大学文学部教育学科
講師　石橋　哲成

（注）石橋講師と一名の学生は教養ゼミ―西ドイツの教育を考える―特にシュタイナー教育について―の合宿で〝成人の日〟にかけて来泊された。

●暮と正月の交流風景から

12月23日、四グループ一二八名がクリスマスにちなんだ夕食会で交流。〝ご用納め〟前日の27日昼食時、恒例の餅つきが遠来荘で行なわれ、七グループ二四二名が参加。屋外では教師、学生、ハウス職員が交互に杵をとり（**写真下**）、屋内では毎夏8月6日に平和祈念の鐘を打ってくれる文教研の参加者らがいろりを囲んで交歓した。1月7日の昼食には、七草粥が供された。

15日は「成人の日」。在泊者中の〝新成人〟は、例年より少なく計四名。共同セミナーの参加者二名には送別茶話会の席上、また玉川大石橋ゼミの二名にはセミナー室での演習の合間に〝祝成人〟の機会を設け、ハウスからの記念品を贈って祝福した（**写真前頁下**）。

歳末餅つき風景（遠来荘前庭）

●歳末助け合い募金報告●

年末12月2日～28日に実施されたハウス恒例の「歳末助け合い募金―心身障害の子らに励ましのカンパを―」には、計六〇グループの来泊者から計一五万九、六〇八円をお寄せいただきました。これにハウス職員からの寄金を加え、募金合計額は一七万七、三七二円となりました。これは同月28日、例年のように、同じ多摩の丘にある島田療育園（社会福祉法人・日本心身障害児協会）の園児たちへ、歳末の贈物としてお届けし、深い感謝をもって受領されました。ここに本紙上より、ご支援下さった各グループの方々にご報告し、厚くお礼を申し上げます。

◆新春の合宿に想う

セミナーの丘で84年のスタートを切った利用者の方々に、新年の抱負や感想を綴っていただきました。その中から数篇を拾ってご紹介します。

学園紛争の渦中、もう一度真理に立ちかえって出発するために始められたこの東神大セミナーは、新年初頭にきまってこの地で催され、一五回目になります。

「神の痛みは、人間の神否定によって破れ傷つきながら、しかもあくまでこの人間を包み愛するのです」。主題講演者の言葉を多くの人々が種々な想いをもって、また新しく聴きいりました。

Plain Living, High Thinking の掛け軸と美しい夕焼けと中川館長のお顔とを見るために、また来年も山を昇ってきます。

【東京神学大学第15回教職セミナー】松永希久夫（東神大学長）

正月気分を引き締めて、新しい年の研究活動のスタートを切るとともに、一挙にコンディションを盛り上げるべく、セミナー・ハウスを訪れた。新年一番目の来訪者であるとかで、「思想は高潔に、生活は簡素に」（信泉書）のポスターを頂いた。久し振りに訪れたが、職員の方々の心のこもった暖かい微笑に接して、やはり来てよかったと思った。その他の多勢の利用者たちから伝わってくるエネルギーも、適度の刺激を与えてくれた。

ウィーンで与えられた宿題をこなすべく持参した小型スーツケースいっぱいの資料のかなりは、手つかずのまま残ってしまったが、それでもコンディションの調整は一応できたつもりである。宿題の仕上げの時に再度来訪したいと思っている。

大学セミナー・ハウスの今後一層のご発展を心から祈る次第である。

【個人利用】箱木真澄（福島大学教授）

大学セミナー・ハウスで一泊お世話になって、思いつく言葉が「至れり尽くせり」。"plain living" などととんでもない。心からすばらしい施設だったと感じている。

今回、他学年、他学部の人たちと交わることにより、自分の知識不足を改めて感じた。私の今年の抱負は、「わが学生生活の興亡この時にあり。自ら一層奮励努力せよ」。Z旗を翻して二年以降を有意義に過ごしたい。

【立教大学香原ゼミ】染谷孝章

大変お世話になりありがとうございました。おかげさまで、新年にふさわしく、すがすがしい気持で三日間を過ごすことができました。これからクラブを引っぱっていく部長にとっては、学校内だけでは味わえない貴重なものを得たようで、他の参加者たちも心強く感じたことと思います。

毎日、激しい車の往き来を窓の外にみて授業を受けている私たちにとって、セミナー・ハウスでの大きな窓いっぱいに見える緑に囲まれて聞いた講義が、とても新鮮でした。先輩の体験談やアドバイスも生の声として、ひしひしと私たちに伝わってきました。このハウスでの経験を生かして、一年間部長として精一杯クラブに打ち込もうと思います。

【産業能率短大リーダーズ・トレーニングキャンプ】吉沢美代子

産業能率短大リーダーズ・トレーニングの実施要項から

＜**目的**＞①意識と責任感に燃えたリーダーを養成する。②課外活動運営システムを理解する。③他との融和を図り、産能短大生としての連帯の輪を広げる。

＜**対象者**＞59年度承認サークルの部長と他一名。

＜**プログラム**＞

学内研修日 '83年12月14日18時

合宿研修日 '84年1月6～8日

合宿研修日程表

（注） 右掲の吉沢美代子さんの感想文「新春の合宿」参照。

	1／6（金）	1／7（土）	1／8（日）
		朝食	朝食
9:00		・クラブって何だろう（理想・現状・対策）（GD）	・新入生オリ・プロ『クラブ』紹介の運営検討
10:00			
11:00			・大学がサークル活動に期待するもの（講義）
12:00		昼食	昼食
13:00	・集合	・先輩からのアドバイス	解散
14:00	・開会挨拶 ・自己紹介 ・課外活動指導基準説明	・各サークルの活動計画立案 〔各サークル〕	
15:00			
16:00			
17:00	・よきリーダーになるために（講義）		〔注〕GD＝グループ・ディスカッションの略
18:00	夕食	夕食	
19:00	・クラブって何だろう（GD）	・活動計画発表 ・サークル委員会との意見交換会	
20:00			
21:00	・懇親会		
22:00	消燈	消燈	

◆わたしたちの合宿◆

八王子での仕上がり

――上智大学国際法演習

上智大学教授　高野　雄一

今回（83年）で六年目になろうか。12月の初頭に学生を連れて必ず二回、八王子の丘に登ってくる。国際法演習の、一度は学部の学生、もう一度は大学院の学生。一泊二日の共同生活と演習。短いがみっちりと二時間三回の演習。4月に始まった通年制の演習がほぼここで仕上がる。めいめい生活と勉強のそれなりの充足感を得て丘をくだる。年内はそれでお休み。1月に一度集まるが、あとは八王子ゼミを最終の手がかりにめいめいが執筆するファイナル・レポートが2月初頭までにくるのを期待して待つだけである。

＊

私が、いつどのようにして大学セミナー・ハウスに行くようになったか。正確におぼえていないが、教え子の横田洋三先生など一、二の方が「大学共同セミナー」の委員をしておられたのが、ご縁の始まりだと思う。そのようなことで、74年初めの第64回大学共同セミナーを最初に、71回（同年末）、92回（77年）と、ハウス主催の共同セミナーに参加し、他大学の先生方、多くの大学の学生諸君と二泊三日をご一緒した。いずれも国連に関連したセミナーだった。ことに第92回のときは、当時の飯田館長の肝いりで、私の定年退官（東京大学）を記念しての企画ということだった。

＊

その年、上智大学にきてからも、この八王子での新鮮で楽しい経験が、私をして、演習の学生を連れて毎年この丘を訪れることにさせた。

東大では二単位だったが、上智では四単位一年の演習である。卒業（学部）を前にした4年生の必修である。四月初めて顔を合わせる。いつも十人か十数人くらい。発言は最初どうも不活発。演習主題の輪郭を話しながら、主題の下でめいめいが関心のテーマをもつようにしむける。そして第一次ペーパーを書いてもらう。すこしずつ発言。夏休み前に演習旅行をすることもある。秋には、第一次ペーパーの改訂増補版作りをめざして演習。これが中間レポートとして八王子直前までに出てくる。それをもとにして八王子ゼミを構成。……こういう次第である。

演習を終えて（交友館前庭）

法人ニュース

◆第9回運営委員会

'84年1月25日
大隈会館

開館20周年記念事業計画について継続審議を行なった。

◆昭和58年度第2回共同セミナー委員会

'83年10月14日
東京ガーデンパレス

第2回委員会は一六名の委員の出席の下に開催され、年度後半の企画の準備報告と、次年度の企画について協議が行なわれ、以下の決定をみた。

・第5回大学院共同セミナー「進化論」（尾本恵市委員）
・第129、130回大学共同セミナー「男と女」（杉田弘子、青柳清孝両委員）と「科学ジャーナリズム」（江沢洋、戸沼幸市、黒田道雄の三委員）の二案を、全体の企画をみながら具体化する。

〔出席者〕岡宏子、黒田道雄、江沢洋、板垣雄三、熊坂敦子、岡野加穂留、小田晋、前田愛、宮田登、尾本恵市、田中義久、深海博明、戸沼幸市、青柳清孝、杉田弘子、池上嘉彦（敬称略）

◆昭和58年度共同セミナー委員会正副委員長会議

'84年1月23日
東京ガーデンパレス

委員の約半数の任期が満了となる当委員会の次年度人事を中心に、本年度年間プログラムの開催状況および、懸案の企画の具体化をめぐって議した。

〔出席者〕岡宏子、黒田道雄、江沢洋（敬称略）

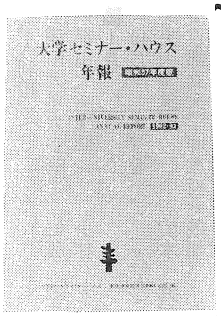
◆昭和58年度国際プログラム委員会正副委員長会議

'84年1月19日
東京ガーデンパレス

当委員会は'82・'83年度の二年で全委員が改選期を迎えるため、次期委員の人選について議した。

〔出席者〕中嶋嶺雄、広野良吉、三輪公忠（敬称略）

「大学セミナー・ハウス年報」改訂版の発行



広報資料としての用途を重視し、内容・体裁を一新した「改訂版―昭和57年度年報」（B5判38頁）が、昨年12月に完成した。編集作業は企画室業務の間隙をぬって行なわれた。編集方針については、当ハウスの旧スタッフ・岡山猛、河田喬夫の両氏の助言をいただいたことを記して、感謝の意を表しておきたい。

●寄贈図書

'83年11～12月

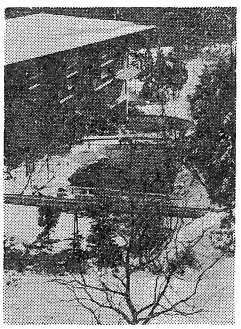
「国際交流」36　国際交流基金殿
「早稲田フォーラム」42　早稲田大学総長室広報課殿
「東西寮60年」　東京女子大学殿
「現代詩研究」309　現代詩研究所殿
「Culture identity and Modernization in Asian Countries」　国学院大学日本文化研究所殿
「連帯　ポーランド自主労働組合」　佐藤和男殿
「内面への旅」　堀　光男殿
「豪日関係」他二冊　日豪学術文化センター殿
「総研論集」5　関西学院大学総合教育研究室殿
「新しき村」11～12月号　安達義明殿
「アジアの友」10・11～12月号　アジア学生文化協会殿
「海外における日本語教育の現状と問題点」8　日本語教育学会殿
「科学と創造」　江沢　洋殿
「政治経済史学」201～209　彦由一太殿
「南北問題」　深海博明殿
「現代金融理論」　鶴岡義一殿
「一般教育学会誌」5巻2号　一般教育学会殿

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰り利用者を除く

■12月
（100グループ、延三、五〇八人）
中央大学教授　高橋　由明

中央大学助教授　斎藤　叫
法政大学教授　松尾　太郎
上智大学教授　高野　雄一
帝京大学薬品分析第4回卒論セミナー
明治大学教授　長谷川昭彦
法政大学助教授　山本　健児
成蹊大学文学部文化学科卒論オリエンテーション
杏林大学婦長研修会
電気通信大学物理工学科三年研修
東京都立大学教授　下山　瑛二
東京都立大学教授　大島　一郎
日本大学教授　瀬在　良男
東京電機大学教授　八木沢壮一
中央大学助教授　村越　邦男
東京都立大学教授　馬場　英夫
明治学院大学教授　中山　弘正
学習院大学教授　佐竹　義昌
東京大学助手　稲増　龍夫
東京大学助教授　坂部　恵
電気通信大学教授　荻原洋太郎
東京学芸大学教授　渡辺　益男
東京都立大学歴史学研究室　宮崎　良夫
早稲田大学講師　染谷恭次郎
早稲田大学教授　山野　康美
明治大学講師　下村　康正
中央大学教授　増田　茂樹
明治学院大学教授　根岸　照雄
工学院大学助教授　林　義雄
埼玉大学講師　松野　憲二
明星大学教授　鴨　武彦
早稲田大学教授　広田　功
中央大学助教授　小堀　宏甫
明星大学教授　伊藤　文人
東京都立大学教授　渋谷　隆一
早稲田大学講師　矢作吉之助
早稲田大学教授　堀部　政男
一橋大学教授　鶴岡　義一
早稲田大学教授　渋谷　隆一
早稲田大学政治経済学部2—28　平沢　茂一
早稲田大学教授　村松林太郎
早稲田大学教授　三戸　公
立教大学教授　田中　尚夫
法政大学教授　山崎　昭
一橋大学助教授　川原　栄峰
早稲田大学教授　石崎　忠司
中央大学教授　工藤　恒夫
中央大学教授　梶谷　洋司
東京工業大学助教授　小池　生夫
慶応義塾大学教授　池井　優
慶応義塾大学教授　色川　大吉
東京経済大学教授　原　誠
東京外国語大学教授　飛田　満彦
東京都立大学教授　大頭　仁
早稲田大学教授　五味　健吉
法政大学教授　太田　卓
法政大学教授　向坂　寛
日本大学教授　宮本日出雄
千葉商科大学教授　金澤　孝文
東京都立大学教授　広瀬合同ゼミ
東京都立大学平田・
青山学院大学寺崎・岡田ゼミ　加藤　豊
法政大学助教授　高橋　進
東海大学助教授　小川　哲生
明星大学助教授　桐谷　維
東京都立大学教授　原　伸子
法政大学助教授　須田精二郎
工学院大学助教授　篠原　克幸
工学院大学助手　高橋　静昭
工学院大学助教授　厚東　偉介
立正大学教授　佐藤　豪
慶応義塾大学教授　宇野　重昭
上智大学講師　中村　英雄
早稲田大学教授
上智大学ITC　田村　皖司
杉野女子大学教授　広瀬　鎌二
武蔵工業大学教授
慶応義塾大学ビブリオメトリックス研究会　山川　仁
東京都立大学講師
恵泉女学園短大英文学科総合講座
「国際」合宿セミナー
多摩美術大学教授　増田　正
玉川大学教授　彦由　一太
第4回社会学合同セミナー
科研郡内機業圏の研究会
発展方程式研究会
国際学生シェイクスピア連合
ITCリユニオン
国際経済商学学生協会
古代解放運動史研究会
第125回大学共同セミナー
町田市心障教育研究奨励グループ
文学教育研究者集団
アイワールド＊＊＊


雪景色——国際セミナー館とかやばし

岩崎通信機電子部品部
東芝プロセスソフトウェア
〔個人利用〕
早稲田大学大学院生　佐藤　公彦
早稲田大学講師　小林　宏一

■1月

（49グループ、延一、八一八人）
中央大学講師　山本　武利
東京都立大学助教授＊磯部　力
立教大学教授　香原　志勢
工学院大学助教授　吉田　倬郎
駒沢大学教授　渋谷　隆一
駒沢大学電気美術部
産業能率短期大学リーダーズ・トレーニング　田内　幸一
一橋大学教授　稲垣　寛
東京都立大学教授
東京農工大学消費生活協同組合　師岡　孝次
東海大学教授　諸井勝之助
東京都立大学教授　山住　正己
東京都立大学助教授　中本　正智
日本大学教授　堀内　清司
中央大学教授　高柳　先男
東京理科大学教授　狩野　紀昭
明治大学教授　横田　澄司
順天堂大学医学部新P3クラス・セミナー　高階　秀爾
東京大学教授　森　武麿
駒沢大学助教授　上原　孝吉
白鷗女子短大教授
東京神学大学教職セミナー　山口　和孝
都留文科大学講師　石橋　哲成
玉川大学講師　若槻　泰雄
玉川大学教授
丘陵地研究会
国際経済研究会
チトクロームP-450研究会
種生物学研究会
トランスプラントシンポジウム
第126回大学共同セミナー
弓町本郷教会教会学校
日曜日訴訟支援会
日本山岳協会
FLY-FLAP
山村硝子
東京城南三菱自動車販売
沖電気工業
アイワールド
日本電気
システムズプランニング
全農協労連東京地本
〔個人利用〕
早稲田大学教授　大頭　仁
玉川大学助教授　甲斐　隆
東京工業大学助手　樋口　一辰
福島大学教授　箱木　真澄
東洋大学教授　堀　光男

●編集後記

第125回大学共同セミナーは、われわれが「日本国に属している日本人」をどこまで払拭できるかをつきつけた。異質の〈文化〉を捉えることは、われわれの感覚を働かせ、全存在をかけて取り組む作業なのだろう。そして大事なことは想像力である。

作家の李恢成氏のお話に対する一学生の「言葉の使い方によって、これほど想像力をかきたてられるとは思わなかった」という感想に、私は感動した。

（能）

予告

▼第5回大学院共同セミナー

主題　進化論——その功罪と現代における再検討——

期日　6月29日～7月1日

〈講演・演習〉

A化石が語る生物進化の証拠——漸進説か断続説か——（東京大学総合研究資料館助教授　速水格氏）／B人類の進化——分子進化と表現型進化——（東京大学理学部教授　尾本恵市氏）／C社会生物学と進化論（慶応義塾大学経済学部助教授　岸由二氏）／D進化論前夜——〝進化〟概念の思想史的意義——（東京外国語大学外国語学部教授　小浪充氏）／Eさまざまな社会進化論——楽天的世界像と厭世的世界像——（早稲田大学政経学部助教授筑波常治氏）／F社会ダーウィニズムの行きつくところ（三菱化成生命科学研究所副主任研究員　米本昌平氏）

〈運営委員〉

東京大学教授　尾本恵市氏
東京外国語大学教授　小浪　充氏

〈申込締切日〉6月15日